

関西支部 京機会MOTセンター(KMC) 活動報告

大連市訪問

京機会MOTセンター(KMC)では、日本の技術系人材の指導を強く要請している、中国遼寧省大連市を訪問して市の要望を伺い、会員のキャリア活用事業の一環としてこれに協力する道があるものかどうか調査してきた。第一回訪問の結果を以下に報告する。



大連東海公園にて

1. 訪問日時 2007年3月14日 17日
2. 当方メンバー KMC会長 坂戸瑞根、事務局長 中谷征司
 運営委員 棚橋啓世
 仲介者、通訳 宋 芳 さん
 大連経済技術開発区招商一局一部(日本担当)

3. 訪問先

名称	内容	日時	対応者
恒瑞精機	工具、金型メカ	14日	ZOU 総経理
井上模具	金型メカ	14日	宋工場長、郭営業課長
人事局	外国専門家局	15日	郭副局長、黄副処長
大顕集団	国営総合電気メカ	15日	シヨールム見学だけ
JETRO 大連		15日	日向経済情報部部長
軽工業学院	機械加工・自動化学院	16日	揚教授元九大
大連理工大	模具研究所	16日	宋副所長
中小企業局	模具協会	16日	徐会長

視察した限りでは現場の管理状況などのレベルはかなり低い。ただ相手が金型・治工具製造現場であり、かつあまり外国特に日本の指導を受けていない小企が主体であったため、大連全般のレベルとは言えない。

4 . 大連市概略

人口； 約600万人 内日本人 5,000人（正規には3,000人）

GDP； 2,150億元（2005年；内2次産業46%）前年比 14%アップ

全中国 182,321億元（2005年） 前年比 10%アップ

日本向け輸出 37%、（第2位 米国 13%）

日本からの輸入 29%、（第2位 韓国 12%）

日本の比重は徐々に下がりつつあるものの、依然として最大相手国であり、日本びいきが多い。

外国企業 11,000社 内日系 3,000社（内開発区に600社）

日系企業の輸出額は、大連全体の56%になる。

中国東北地方の看板都市、国内ランキング第6位の大都市ではあるが、自動車完成品工場がないこともあって、GDP1%強、所詮田舎都市である。ただ毎年15%程度の発展を続けており、中央政府から東南アジア交流センター、石油化学、ソフトウェア、造船などの中心になることを期待されており、そのためにも日本との交流促進により優れた製造技術を導入したいと、そのまなざしは熱い。

5 . KMCとの今後

日本からの技術注入、人材交流を盛んにするため、日本と継続的かつ強力なパイ



プを作りたいと熱望しておられる。このため、(KMCの現状は理解してもらえたとは思いますが)京機会ネットワークを武器とする我々の力には大きく期待しており、持続的交流を何度も要望された。(人事局 外国専門家局)

これからの予定は

- 1) 5月24日 27日 日本ウイーク開催(大連にて)
日本の人材を迎えて、大連市および市内企業の紹介を行い、交流する。
日本の人材派遣関連団体、個人の参加を希望している。
KMCにも強い参加要望あり、坂戸会長あて、案内状がきている。
- 2) 大連市各企業からの、日本人材受け入れリストを送付してきた。
対象を機械系技術者にしぼると、要請人数は約100名。
- 3) KMCとは今回に限らず、継続的な交流を希望している。

現在関西支部KMC会員を対象に、大連への応募希望者を募っているが、他支部の方や、KMC会員以外でも興味のあるかたは、遠慮なく資料請求やご質問をお寄せ下さい。

以上

文責 KMC事務局 中谷 征司('62)

京の春の終わり、「都をどり」



前号の祇園の写真、昔を懐かしむ会員からの丁寧なお手紙を頂きましたので、調子に乗って、空いたスペースに今の京都の紹介する絵を載せさせていただきます。

訃報

鈴木健二郎名誉教授（S37卒）には、4月26日（木）ご逝去になりました。謹んでご報告申し上げます。

告別式は、4月27日（金）東京築地の聖ルカ礼拝堂（喪主：御長男 鈴木陽一郎殿）にて執り行われました。

鈴木先生は、伝熱学のご専門で、最近では水素燃料やマイクロガスタービンの研究に携わっておられました。また、生前、京機会副会長をお努めいただきました。

シリ - ズ 博物館めぐり

レオナルド・ダ・ヴィンチ記念国立科学技術博物館

Museo Nazionale della Scienza e della Tecnica Leonardo da Vinci

吉田 英生（航空宇宙工学専攻）

yoshida@mbox.kudpc.kyoto-u.ac.jp

1. はじめに

Leonardo da Vinci (1452-1519) の名画 " 受胎告知 " が Firenze のウフィチ美術館 (Galleria degli Uffizi) から東京国立博物館に移送され、3月20日から公開されて話題となっている¹。Renaissance 期の万能の天才 Leonardo については膨大な研究や文献があるので、専門家でもない筆者が取り上げることは避けたいが、その名前を冠する博物館（伊：[http://](http://www.museoscienza.org/)



図 1 正面玄関

www.museoscienza.org/

[default.asp](http://www.museoscienza.org/english/Default.asp), 英：<http://www.museoscienza.org/english/Default.asp>: もちろん伊の方が充実しているが英の方でも相当な充実度である) を 2007 年 3 月末に訪問することができたので、この機会にご紹介させていただく。

¹ Mussolini 時代の 1935 年にパリで " イタリア美術展 " と 1939 年にミラノで " レオナルド・ダ・ヴィンチ展 " に国威発揚をねらって出展されたのを除けば、これまで館外不出だったという。(ダ・ヴィンチの秘密, 上, 朝日新聞 2007 年 3 月 13 日, 朝刊)

2. 生誕 500 年記念の博物館

この博物館は Leonardo da Vinci の生誕 500 年を記念して、1953 年に Milano の Olivetan 修道院の建物を利用して開館した。博物館は、やはり Leonardo の "最後の晩餐" で有名なサンタ・マリア・グラッツェ教会 (Santa Maria delle



図 2 入口の案内板

Grazie) の南方 400m ほどのところに位置する。図 1 のように入り口は控えめだが、広大な敷地内に 3 つの建物が配置され (図 2 , 図 3) , 太古から現代に至る広範囲な科学技術に関して展示がなされている。鉄道, 船, 潜水艦, 飛行機などの実物の展示も数多い。

古代ローマから中世の Renaissance にかけて世界をリードしてきたイタリアならではの博物館の味わいがある。図 1 にも写っているように、小・中学生さらに高校生の社会見学の集団に数多く遭遇したことから、この博物館は国民に広く愛されて活用されていることが理解できた。

(つづく)

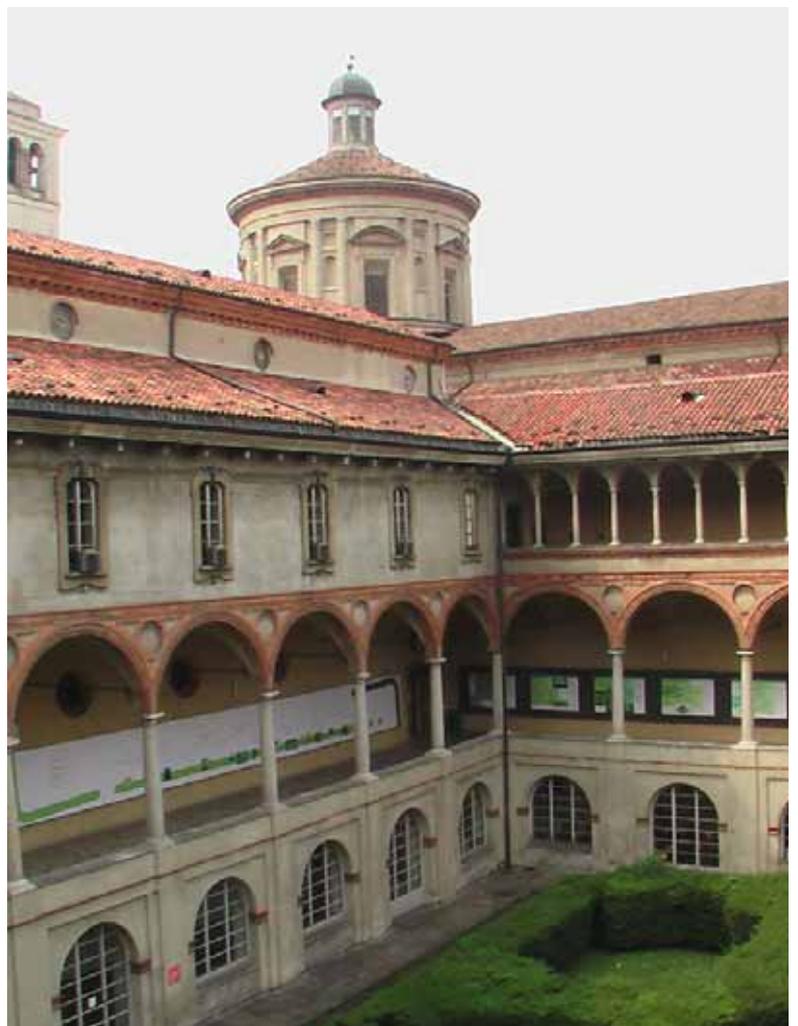


図 3 中庭を望む



有意義な修士課程を過ごそう

SMILE 運営委員 中上義幸

email:ychujo@black.livedoor.com

京機学生会執行部 SMILE は 2007 年 4 月 23 日に「有意義な修士課程を過ごそう」と題した企画を開催した。今年の企画の目的は、「目的意識をもって修士課程を過ごす」というものであった。当日は、3 名の M2 による修士課程の過ごし方の講演と、その後、参加者に 20 名近くの M2 を交えて修士課程について話し合う茶話会という形式で行った。参加者は M1、B4、B3 あわせて 30 名と予想を上回る学生が参加し、大盛況のうちに閉会した。当日の流れは以下の通りである。

第 1 部 講演会

- ・樋口雄一君 (田畑研 M2) 「海外での研究」
- ・片山朋子さん (井手研 M2) 「海外インターン」
- ・高橋祐城君 (松久研 M2) 「KART」

第 2 部 茶話会

参加者を 8 グループに分けて、少人数で修士過程に対する質問・相談など話しあう

第 1 部の講演会では 3 名の M2 が各自の体験に基づいて修士課程の過ごし方の例を提示するという趣旨で講演を行った。1 人目の樋口雄一君には海外の大学の研究室に共同研究という形で 1ヶ月滞在した経験について話してもらった。海外の大学の研究室の現状や日本との違い、海外での苦労やそこから得たものは何かという内容だった。2 人目の片山朋子さんには日欧産業協力センターが主催している海外インターンに 1 年間参加した経験を話し



てもらった。 留学とインターンを同時に行うことで、海外の文化の違いとそれの乗り越え方、仕事をするというはどのようなことか、などを感じることができたという内容だった。 3 人目の高橋祐城君には本学の学生フォーミュラ「 KART 」の代表を務めた経験を話してもらった。 KART の立ち上げから参加し、部門のリーダー、代表と経験していく過程で、1つの物を作っていく楽しさや責任あるプロジェクトをやっていく面白さが得られたと話し、また「何を求めて大学院に行くのか?」「何でも積極的にいけ」「あきらめる必要なんてない」と後輩にアドバイスを送り、激励した。 この3名の講演に対して、参加者からは「日本と海外の違いについて良い話を聞いた」「自分の修士生活も充実させたいと強く思った」という声が多くあった。

第2部の茶話会では、参加者 30 名に講演者3名を含む機械系の M2 の 20 名を加え、それを 8 グループに分けて少人数で修士課程について話し合った。 昨年も同様の形式で修士課程に進学する意味についてディスカッションしたのだが、今年は硬い議論なしに参加者が修士課程について聞きたいことを聞けるようにするため、茶話会と名前を変え、和やかな雰囲気では話が進むように心がけた。 その結果、昨年よりも参加者が思い思いの質問をすることができ、アンケートの結果からも、より満足してもらったことができた。

企画責任者として、今回は講演者や参加者が学生だけの企画ということで、和やかにかつ中身のあるものにしようと心がけた。 その結果、参加者は機械系の先輩後輩という関係の中で気軽に相談し、親身なアドバイスを受けることができた。 特に M1 にとっては修士課程を有意義に過ごそうとするきっかけとなり、学部生にとっては修士課程についてより理解する機会になったのではないかと実感している。 最後に、講演の依頼を快く引き受けてくれた樋口君、片山さん、高橋君の三氏と、この企画に参加していただいた学生の皆様には心からお礼を申し上げたい。

